

The Language of *Kyng Alisaunder* and DO

論文要約

D 125017

松沢 絵里

CHAPTER 1: Introduction

英語の、疑問文や、否定文等における、迂言の DO の振る舞いは、他の印欧語族には見られない発達で、大変興味深い問題であります。DO の研究の重要性は多くの著名な学者が様々な分野から研究していることから分かります。先行する優れた業績に加え、本研究はどのような点で貢献しているのか述べますと、ほとんどの研究が 14 世紀末に迂言の DO が現れた後からの発達に重点が置かれており、DO がまだ、こういった役割を担っていなかった時点での詳細な研究は少なく、また時間を追った DO の研究はあっても、一つの作品のすべての DO について研究したものはほとんどないということです。本研究が資料とした 14 世紀初期の作品にも迂言の DO は現れていません。しかし、すべての用例を詳細に見てみると、やがて迂言の DO に発達する元になると考えられる DO の構造と意味が確認できました。この点について説明します。

CHAPTER 2: The Middle English Romance *Kyng Alisaunder*

資料とした写本は 14 世紀のロンドンの英語で書かれた *Kyng Alisaunder*(KA) という 8021 行の二行連句 (couplet) からなる脚韻詩です。現存する資料は 3 つの手書き写本と 1 つの印刷された資料が現存します。手書き写本は古いものから A、B、L 写本と呼ばれ、一番新しい L は 15 世紀初期のものとしております。400 行あまりしか現存しておりませんが、A は最も原形を残している写本です。この 400 行あまりの A テキストとほぼ完全な形で現存する B が初期ロン

ドンの、後に説明します、サミュエルズのタイプ II、つまり、もっとも初期のロンドン英語の資料に含まれます。

次に、KA の題材となったアレクサンダー大王伝説の位置づけをします。よく知られているように、紀元前四世紀、356 年から 323 年までの、33 年の短い生涯の間に、ヨーロッパからアジアを征服したアレクサンダー大王は、生前から伝説の人であり、今日まで繰り返し、偉大な英雄として語り継がれてきた人物です。その家庭教師であったアリストテレスから、『対比列伝』の著者であるプルタルコス、オロシウスなど、著名な哲学者、歴史家、作家がアレクサンダー伝説を著しました。また、語られた言語も多岐にわたり、ギリシャ語やラテン語はもちろん、アラビア語、古いエジプトの言葉であるコプト語、エチオピア語などにも翻訳されております。10 世紀にナポリの首席司祭であるレオがラテン語で書いた邦題 芳賀重徳訳『アレキサンデル大王の誕生と勝利』という本は、ヨーロッパ中のさまざまな言葉に広く翻訳されただけでなく、アジアのペルシャ語、トルコ語、モンゴル語、マレー語などにも翻訳されました。

イングランドにおいてもその名は古英語 (OE) 時代からよく知られたものであったことは、OE の伝説的詩人であるウイドシスの作品にフン族の王アッティラや、OE 時代のマーシア王であるオッフアなどとともに英雄として語られていることから分かります。そして中英語 (ME) 期になると、理想の騎士として 12 世紀のアンブロフレンチの作品に描かれたほか、ジョン・ガワーややチョーサーの作品の題材ともなっています。そしてアレクサンダーをはじめその周りの将軍たちがどういう人物であったかをよく知ったうえで、この物語を当時の人々は楽しんでいたと考えられます。

次に、この物語の物語としての完成度はどのようなものであったかを説明します。中世のほかの物語と同じように、KA も基本的には、オリジナリティを主張する作品ではありません。しかし、よく知られたエピソードに挟まれている、不倫場面ともとれる興味を引くエピソード、現代人にも通じる父と息子の葛藤などに加え、聞き手の興味をそそる遠い世界の珍しい出来事などが物語の後半

にはちりばめられ、ホームドラマから、いさましい軍記まで、幅広い内容を背景に、個性的なアレクサンダーの言動を浮き彫りにしながら、娯楽作品としても、また教養を満足させる作品としても非常に完成度の高い作品といえます。

さらに KA を魅力的な作品にしている、いくつかの文学的技法があります。それはイングランドの美しい自然を描写した章頭をかざる文 *headpiece* と、私たちの心に深く響く金言 *axiom* であります。また、その描写方法は映像的で、「パン」と呼ばれるパノラマ的視界を与える描写、下から上へ視点を動かす「ティルト」といわれる描写、また、視点が一点に集中していく「ズーム」的描写をしています。このように、KA は単に写本が現存しているから価値があるというのではなく、詩人の技量が十分高かったことを示し、文学作品としても、良質で価値の高い作品であります。

CHAPTER 3: The Fourteenth-Century London English

ここで 14 世紀のロンドン英語について説明します。14 紀のロンドンには、羊毛産業を基盤として国際的な都市として発展しつつありました。1272 年から 1307 年まで統治したエドワード I 世はウエールズを併合し、わが子にプリンスオブウエールズの称号を与えます。その最初のプリンスオブウエールズはエドワード II 世となり、1307 年から 1327 年まで統治しました。その子、エドワード III 世は 1327 年に王位につき、ついに 1337 年にはフランスと、フランドル地方の羊毛産業の覇権を争い、百年戦争を起こします。KA の書かれた時代は、このエドワード I 世から III 世のはじめごろであります。そして、その発展途上でロンドンには多くの移民を国内外から受け入れ、その人口が急速に増えていった時代でした。

KA に見られるロンドン英語は、この人口増加の時代を反映した多様なものであります。1888 年の Morsback の研究から始まり、Heuser, Flasidieck, Wright and Wright, Zacharison, Jordan, Wyld, Mackenzie, Ikegami, Masui 新しいところで 2005 年の Hanna などが 14 世紀のロンドンの英語を研究しています。1927

年の著書で Wyld は当時のロンドン英語は City Type と Middlesex Type (Westminster Type) の二つの方言に分かれていたことを示しました。

研究の方法としては二つあり、一つは脚韻により音価を推定するもの、もう一つは綴り字によるものですが、後者は、初期の研究者がしているように、綴り字を音価推定の手掛かりにするのではなく、その綴り字そのものの変異形（異綴り）から方言の等高線を導くもので、確立したのは Samuels 1963 です。サミュエルズはその研究から 14 世紀のロンドンには 4 つの異なるタイプの方言が存在していたとしました。

Type I: 宗教改革者ウイクリフ(1330-1384)とその追随者ロラードの英語

Type II : 最も初期のロンドン英語（エセックスタイプ）、1216~1272 年の間イングランド王であったヘンリー三世の 1258 年のオックスフォード条約の英語を含む。

Type III : 中東部タイプ、チョーサーの英語が代表的

Type IV : ウェストミンスタータイプ（Chancery Standard へ）

Hanna 2005 ではさらに、写本の流通等の研究を含め Type II に含まれる文献を特定しました。そして特に KA の A と B は 14 世紀のもっとも初期のロンドン英語であるとししました。また、A が含まれるオーヒンレック写本等は、KA-グループの作品とされる、*Of Arthur and Merlin* (AM), *The Seven Sages of Rome* も含まれています。以上の研究から KA が初期ロンドンの英語を知る重要な文献の一つであることが分かります。

CHAPTER 4: THE LANGUAGE OF *Kyng Alisaunder*

ここでは KA の言語がどのようなものであったかを見るため次の音韻、および形態の分析をしました。(1) OE /æ:/; (2) OE /æ:a/; (3) OE and ON /y:/, /y-/ , and /y/; (4) Open Syllable Lengthening and Word Final -e; (5) Morphological Variant: 動詞

の語尾; 過去形; BE 動詞; 代名詞 (†HI or THEY; †HOO or SHE)。この観察から、KAの言語は、動詞の活用は PE に近づいていますが、音韻と形態においては古い形から PE 形と同じような非常に新しい形までが混在しているということが分かります。14 世紀のロンドン英語はこのように多様であったわけです。

CHAPTER 5: Usage of DO in KA

ここでは、このような多様性に富む 14 世紀のロンドン英語における DO の振る舞いを分析しています。DO は西ゲルマン語源の動詞で、西ゲルマン語には共通して存在します。しかし、北ゲルマン語とゴート語にはない単語でした。まだ助動詞として発達していなかったこの時代の DO には PE の DO のようなほかの動詞と際立って異なる機能はありません。したがって、まず、よく似た構造を持つ、GIN、その次に、他の使役の意味のある動詞、最後に、過去現在動詞であったものがほとんどですが、PE で助動詞として発達する動詞と働きや構造を比較し、この時代の DO がどのような位置づけにあったのかを説明していきます。

まず、OED により、DO がどういう意味を持っていたかを説明します。OED は 2014 年に DO の項目を改定し、I. 主動詞 そして II. 助動詞 用法に分け、助動詞をさらに、使役、代動詞、迂言用法に分けています。KA には 281 の DO の用例がありますが、本研究では DO および、比較するすべての動詞について、次の方法で分類しました。

(1) 単独でつかわれる MAIN VERB 用法と、(2) 不定詞を伴う、VERB V 用法。

(2) の VERB V 用法では、VERB が目的語を伴う場合があります。その場合は VERB O V と表記します。この VERB と O と V の関係は統語的なもので、語順は関係ありません。また、(1) の MAIN VERB 用法に戻りますと、これは必ずしも文の主動詞のみを指し示すのではなく、定型動詞、TO 付き不定詞、TO なし不定詞、過去分詞、代動詞、励ましの動詞、の 6 つを含みます。いずれも不定詞を従えない DO であります。KA の 281 例の DO のうち、一般動詞が 169、代

動詞 34 励ましの動詞 1 で残り 77 が(2)の DO (O) V 構造となります。さらに DO(O)V 構造のうち DO V が 60 で DO O V は 17、DO の場合は目的語のない DO V 構造の数が非常に多いことが分かりました。

CHAPTER 6: DO and GIN: A Comparison

GIN は BEGIN または ONGIN の語頭音消失系で特に過去形の *gan* は ME 韻文に頻繁に現れます。そして 'begin' の意味を保ちつつ「PE の迂言の過去の *did*+不定詞のように、非常に軽い意味で過去を迂言的に表すときに使われる助動詞である」と OED にはあります。KA には 105 の GIN が表れますがそのうち *gan* は 45 例です。一方 DO の過去形 *dude* は 281 例のうち 81 例現れます。

先行研究のうち Mustanoja、Terasawa、Brinton は ME 韻文における GIN の機能を、語り手あるいは詩人と、聴衆の間の語用論的観点から説明しています。つまり、*gan* の描写力 *descriptive force* という観点からこれが、談話標識 *discourse marker* つまり、聞き手が連続した物語の理解を助ける言葉としています。こういった観点から KA B の *gan* をみていきます。

最初に動詞の屈折形について DO と比べます。特徴的なことは DO が一般動詞と同じように、全人称の現在・過去で活用し、KA には現在分詞はありませんでしたが、不定詞や過去分詞があったのにたいし、GIN は三人称単数と複数の過去と現在のみで活用します。つまり主語は三人称のみということです。KA に関していえば、間接にせよ直接にせよ会話文には現れず、詩人が語る地の文のみに GIN は現れます。

用法についていえば、DO は DO O V 構造であれば曖昧性のない使役の意味になります。しかし DO V 構造は不定詞 V の意味上の主語が明示されていないため、後で説明しますが、EME 期には存在の立証ができないけれども、強調文の解釈の可能性があり、使役の解釈も可能です。また、この構文すべてに当てはまる

わけではありませんが、使役の解釈は不可能で、迂言、または強調ととれる例もあります。また、命令文に使われた DO は OED, *Mustanoja* も使役の意味に加え、ほぼ明らかに強調の意味が加わっているとしています。

一方 105 例の GIN のうち 3 例のみが MAIN VERB 用法で、他の 102 例は不定詞をとる例です。そのうち 90 例 (88.8%) がその不定詞が脚韻語になっているため GIN の一つの用法は韻文において、不定詞を脚韻語にすることであると考えられます。GIN V において GIN そのものが脚韻語になっている例が一例。DO が不定詞を脚韻語に置く例は 50% ですので、GIN の重要な用法の一つとして不定詞を脚韻後の位置に置くために使われたのはほぼ間違いないと思います。

先行研究では GIN は新しい物語のエピソード *gest* が始まる時や、時間の推移を表すとき使われるとされていますが、KA では GIN と同様、BEGIN が *gest* の始まりに使われる例が 3 例ありますが、GIN は *gest* の始まりの場面でつかわれているのが 1 例、そして陽が沈む場面でつかわれているのが 2 例あるだけで、この用法はあまり多くありません。

次に、共起する不定詞について説明します。Terasawa 1974 では、動作、発話、視覚、感情の動詞と GIN は共起する傾向があるとしています。確かにその傾向はあるものの、それ以外の動詞とも共起し、さらに同じ動詞、つまり不定詞が DO のあとも、また GIN の後にも続くということも 17 の動詞でありました。その中で用例が多く違いが明白な BEAR と CRY について、比較してみました。

(1) BEAR (70 例)

BEAR は四つの違った意味がありますが、GIN+BEAR は II. 'thrust' の意味の時のみに使われています。そして DO の時は I. CARRY の意味で使われています。ほかの助動詞は様々な意味の BEAR とともに現れるため、GIN は動作を表す意味の時に使われているのが分かります。

(2) CRY (19 例)

次に CRY ですが、一般的に物語で叫び声あるいは泣き声のある場面は、その場面をより効果的にあるいは劇的にする様々な工夫がされています。DO CRYの構造は、Oがないため使役なのか強調なのか、あるいは同時にその両方にとるのか不明ですが、「たちどころに」の意味の ANON をつかったり、繰り返しを使うことによって、泣き声あるいは叫び声の効果を高めています。また GIN と共起する場合は先ほど BEAR の時にみましたように、CRY が起動を表す GIN とともに使われることによってより効果を高めていると考えられます。つまり GIN は明らかな起動を示すことによって、物語の効果を高め、DO は目的語を明示しないために、それが強調の意味にもとれることによって、物語の効果を高めています。**CHAPTER 7: DO AND GIN: METRICAL BEHAVIOUR** で検証しましたが、こういった協調の意味が込められていたと推測できる DO が必ず韻律的に強の位置にくるかどうかははっきりしません。ただし、*gan* の方は強弱の位置がほぼ同じで、韻律を整えるためにも使われたと推測できます。しかし、先に述べましたように優れた詩人であった KA poet がこのような効果を考えて DO または GIN を使ったことは十分考えられ、KA DO には強調の意味がこめられていた場合があったと推測できます。この点については Mustanoja(p.602)も観測しています。

共起する動詞で DO と GIN のもう一つの違いは DO の方は PE で助動詞となる BE、CAN などを不定詞としてとっていることです。

CHAPTER 8: DO AND VERBS OF CAUSATIVE MEANING: BID, CAUSE, GAR, GET, HAVE, HELP, HIGHT, LET, MAKE, ORDAIN

次に使役の DO とほかの使役の意味を持つ動詞を比べます。明らかなのは、他の使役は目的語のない曖昧な構造が少なく、在ったとしても DO のように、使役なのか、強調なのか、単なる迂言なのかといったいくつかの解釈が可能な場合はないということです。つまり VERB V 構造は使役動詞の中で DO のみに特徴的に観察される構造ということになります。

さらに、興味ぶかいのは現代英語にふつうにみられ、また ME Type II や KA グループの作品とされる *Of Arthour and Merlin, The Seven Sages of Rome*

でもすでに存在していたはずの MAKE と HAVE の不定詞をともなう使役動詞の例が KA にはないということです。KA に現れる三例の HAVE TO は二つが MUST の意味であと一つは所有の意味でほかの 493 例は MAIN VERB 用法です。

また、V を脚韻語に置く率も DO より低く、これらの使役動詞は不定詞を脚韻語にするために使われたわけではないと考えられます。また主動詞としての用法の頻度は、DO は比較的高いところにあります。

CHAPTER 9: DO AND MODAL VERBS: CAN, DARE, DOW, MAY, MOTE/MUST, OWE, SHALL, THARF, WILL, WIT

最後に、PE の法助動詞と DO を比べてみます。最初に、DO や法助動詞の初出例を見てみますと、使役の DO やほかの法助動詞が OE からあった用法に対し、迂言は 1300 年ごろから、副詞などが先行するときに DO の倒置が起こる例が 1325 年以降、疑問文 1380 年、強調 1390 年、否定疑問文 1400 年、否定叙述文 1417 年でこれは KA の例と突き合わせても同じ結果です。DO の迂言および、肯定文での倒置は KA でも観察されますが、疑問文、明白な強調文、否定疑問文、否定叙述文の例はありません。

ところが強調用法の DO に関しては、先ほども命令文の DO のところで言及しましたが、MED は初期の例で、強調か使役なのかを区別するのは困難であるとしています。また同じ例文でも OED と MED で解釈が違う場合があり、研究者によるブレを生じるほど、初期の例はこの二つの解釈、強調または使役を区別することが困難であり、OED の初出は明白なものは 14 世紀末ですが、それ以前の例にこの二つの意味が混在していた可能性があります。

ここで PE の DO と助動詞を復習してみます。DO には Denison 1993 が NICE PROPERTY として簡潔にまとめた用法があります。そして、これは他の助動詞にも当てはまる助動詞の働きです。しかし、Quirk, et. al. の分析のように、助

動詞 BE DO HAVE の活用におけるふるまいは、一般動詞とも、他の完全な助動詞と異なります。彼らはこれらの三つ BE、HAVE、DO を助動詞ではなく **primary verb** というグループでまとめています。そして **primary verb** と **modal auxiliary** は **operator** という役割を担い、Denison の NICE PROPERTY に似たふるまいを説明しています。

変形文法では DO に関し、他の助動詞と同じようなふるまいをする現象を従来から **Do-Support** という用語で説明してきました。この用語は DO が一般動詞と共起していわゆる助動詞としての働きをするときに、ほかの助動詞と共通した振る舞いをするをうまく説明するとして Quirk, et. al. も採用しています。

さらに、PE の DO にはイギリス南西部方言、カリブ英語、アメリカの地域方言に、強調の意味がない、単純な過去を表すテンスマーカールとしての用法があります。

では KA の法助動詞はどういう振る舞いをしているのかを説明します。本来過去現在動詞であった WIT は助動詞用法はありません。他の PE の助動詞になった動詞は ME および KA では一般動詞としての用法を残していましたので、不定詞形があるものもあり、直接法はほとんどのもので過去、現在とも屈折します。

次に否定辞 NOT の語源となった NOUGHT との語順、ですが、この語は最初の動詞のあとにつく割合が高く、それは不定詞を従える助動詞の場合も同じです。

主動詞としての用法は DO は高いのですが、不定詞を脚韻の位置に置く割合は、DO V 構造が全体の中でやや低いものの、他の助動詞とあまり変わらず。この点で DO は他の助動詞と明瞭なすみわけはありません。

CHAPTER 10: CONCLUDING REMARKS

多様性を示す KA の言語環境の中で、DO は使役でありながら、物語の演出をより効果的にするための強調の意味も同時に示しながら、つかわれていたと推測されます。これは、KA の韻律面からは明白な証拠が得られませんでした。OED、MED、Mustanoja も DO には不定詞の意味を何らかの形で増大させる用法があるとしています。

Chapter 5 で見たように、KA において、DO は不定詞をとる時、他の使役動詞と異なり現在の法助動詞と同じ、目的語のない DO V の頻度が圧倒的に多いということです。KA においては HAVE や MAKE といった中立的な意味の動詞の使役用法はなく、こういった使役はもっぱら DO が担っていました、それが 15 世紀初期になるとこういった動詞 HAVE や MAKE の使役用法が普通になり、DO 使役がきえます、そして曖昧性がなく明瞭な使役であった、DO O V も消えますが、DO V 構造で、使役と強調の意味をもち、完全な使役といえないもの、言い換えれば曖昧な使役用法や、少数ですが迂言の DO の構造は使役が消えても用法が残るわけですからこの構造は消えず、続いて使われます。このうち、迂言の DO はイギリス南西部方言などには生き残ったが標準英語では消えます。そして後にのこった、強調の意味が明瞭になります。そして、他の法助動詞と同じような構造ゆえに主語に前置された DO がほかの法助動詞と同じように疑問文をつくるようになり、NOT はもともとこの構造では DO のあとにおかれていたため、その構造が否定文をつくるようになったという自然な発達過程が説明できます。

つまり、迂言の DO や強調の DO が、曖昧な構造である、使役の DO V 構造の中に同時にあったため使役の意味を失っても DO V 構造は生き残ることが出来ました。この DO V 構造は法助動詞用法と同じ構造であったため、疑問文、否定文でその用法を取りこみました。このような、現在の DO の用法へと発達していく過程が、まだそれを発達させていない KA の DO の分析から見て取れる、これが本研究の結論です。